

感動詞「あら」の音調と機能

－『日本語日常会話コーパス』を例として－¹

加藤恵梨(大手前大学) 石山友之(国際交流基金日本語国際センター)

1. はじめに

本研究は、小磯他(2019)による『日本語日常会話コーパス』モニター公開版(以下、『CEJC』)をもとに、感動詞「あら」が会話で用いられる際の音調の型を分類する。また、「あら」が有する機能にはどのようなものがあるのかを明示し、それらと音調との関連性について記述する。

先行研究では、「あら」の音調は高低という下降型と、低高という上昇型に分類されている(郡, 2018; 浅田, 2017; 田窪・金水, 1997 など)。浅田(2017)は、下降型は主に中年以上の女性が用いて「問題に気づき驚く声」を表すのに対し、上昇型は男女を問わず使われ、「意外な真実に気づき、問題視する声」を表すと述べている。また、郡(2018)は下降型の「あら」は「予想外の状況になったとき」に使い、「理解や納得ができない気持ちをあらわす感動詞は、アクセントの下げをなくして、疑問型上昇調を付ける」と述べている。このように、音調型によって使われ方や使用されやすい性別などが指摘されている。さらに、浅田(2017)は、「あら」の中に上昇や下降がなく、「あ」と「ら」がともに「話し手の音域での高い声」や「中ぐらいの声」となるものがあることを指摘している。この型は、「あら、どっこいしょ」や「あら、よっと」のように、「後ろに続く『どっこいしょ』『よっ』を導き出すための勢いづけの声」とであると述べている。

2. 分析の方法

『CEJC』から、品詞が「感動詞 - 一般」である「あら」の用例を抽出した。その際、「あらー」「あらま」などは除外し、書字形が「あら」であるもののみを対象とした。その後、音声解析プログラムPraatで「あら」のピッチ曲線を抽出し、ピッチ曲線と聴覚印象をもとに音調を分析し、型の分類を行った。また、前後の文脈から「あら」の機能を分析した。

3. 全体的な結果

『CEJC』で「あら」を抽出した際に、検索結果には現れるものの該当する音声が見つからないものが1件あった。また、話者が自身の過去の発言を引用する中で「あら」が使用されているものが3件あった。今回の分析からはこれら4件を除外した。その結果、『CEJC』では37名による95件の「あら」が見つかった。『CEJC』の異なり話者数は237名、総語数は約609, 327語(短単位)であることからすると(小磯他, 2019)、非常に少ない数である。

表1は、「あら」の使用者数、使用回数を話者の年代別に示したものである。

年代	使用話者数			使用回数		
	女性	男性	合計	女性	男性	合計
20代	2	3	5	3	19	22
30代	6	1	7	8	1	9
40代	6	0	6	21	0	21
50代	9	1	10	18	3	21
60代	5	0	5	17	0	17
70代	2	1	3	3	1	4
80代以上	0	1	1	0	1	1
合計	30	7	37	70	25	95

¹ 本研究は『日本語日常会話コーパス』モニター公開版(小磯他, 2019)を利用して行われたものである。

表の通り、男女別の使用者数、使用回数は、男性が7名25回、女性が30名70回であり、女性の使用者数、使用回数の方が多かった。

4. 「あら」の音調の分析

『CEJC』で抽出した95件の「あら」の音調を分析した結果、周囲の雑音や話し声によってピッチが正確に計測できないものが1件あった。これを除く94件の「あら」の音調は、5つの型に分類できることがわかった。各音調型と使用回数は表2の通りである。最も多かったのは下降型で、全体の約47%を占めていた。その次に多かったのは上昇型で、以下、上昇下降型、不明型、平坦型という順であった。話者の性別を見ると、音調に関係なく男女の使用があった。

表2 各音調型とその使用回数

音調型	説明	使用回数		
		全体	女性	男性
I 下降型	「あ」のピッチが高く始まり、「ら」で下降する	44	29	15
II 上昇下降型	「あ」でピッチが上昇し、「ら」は下降する	13	9	4
III 上昇型	「あ」のピッチが低く始まり、「ら」で上昇する	20	16	4
IV 平坦型	顕著なピッチの上下がなく、平坦なピッチ曲線となる型	8	7	1
V 不明型	無声化等の要因により、ピッチ曲線が現れない型	9	8	1
	(合計)	94	69	25

Praat で抽出した各音調型の典型例の波形とピッチ曲線は、以下の図1(a)から(e)の通りである。図1(a)は下降型の例である。ピッチ曲線を見ると、「あ」が高い位置から始まっており、「ら」でピッチが下降している。図1(b)は上昇下降型の例である。ピッチ曲線を見ると、「ら」でピッチが下降する点は下降型と共通するものの、上昇下降型では「あ」の中でピッチの上昇がある点が異なる。図1(c)は上昇型の例である。「あ」の中ではピッチに大きな変化がなく、「ら」でピッチが上昇している。

これまでの3つの型はピッチ曲線からピッチに上昇または下降がある型であった。しかし、図1(d)のように、顕著な上下動がない、平坦なピッチ曲線となっているものがあった。このような音調を平坦型とした。浅田(2017)もピッチが平坦な型の存在を指摘していたが、勢いづけのために用いられると述べていた。しかし、『CEJC』に現れていた平坦型は、「あら忘れちゃった」「あら楽しそう」のように、勢いづけとは考えられない場合に使用されていた。

さらに、「あら」という発話で無声化、「きしみ声」化が起きているものもあり、このような場合、図1(e)のように、ピッチ曲線を正しく描写することが不可能となる。このような例を不明型とした。

先行研究では「あら」の音調は上昇型と下降型のみか、もしくは浅井(2017)のようにそれらに加えて平坦型を挙げている。しかし、実際の会話の中では先行研究で指摘されているよりも多様な音調型が現れることが明らかになった。以下では、便宜上、図1(a)から(d)までの音調型を、ピッチの動きに合わせて「↓」「↑↓」「↑」「→」という記号を用いて示すこととし、図(e)の不明型は、無声化、「きしみ声」化をそれぞれ「devoiced」「creaky」と示すこととする。また、雑音と話し声によって除外した1例を「noise」と示すこととする。

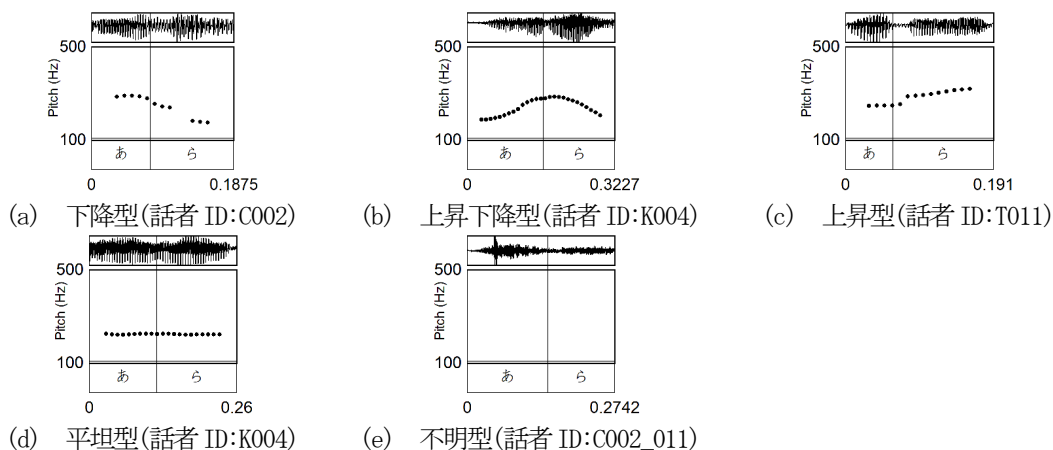


図1 各音調型の波形とピッチ曲線

5. 「あら」の機能と音調との関連性の分析

男女別の「あら」の機能と音調についての詳細は、表3と表4のように記述することができる。

表3は、女性が「あら」を誰に対して、どのような機能で用いているのか、またその際、どのような音調が使われているかをまとめたものである。

表3 女性の「あら」の使用

「あら」の機能		音調	人数	使用者の年代 (会話の相手)
何かに驚く	相手の発言に驚く	↓	9	20代(20代友人男), 30代3名(40代友人女2回, 40代友人男), 40代2名(40代友人女2回), 50代2名(60代姉3回, 30代友人女), 60代(60代知人女)
		↑	3	30代(30代友人女), 40代(40代義妹), 50代(50代友人女)
		→	3	30代(30代友人女), 40代2名(70代母, 40代友人女)
		↑↓	2	50代2名(40代友人女, 60代姉, 80代母)
		creaky	1	50代(50代友人女)
		devoiced	1	60代(50代妹)
	ある物事を見て驚く	↑	2	50代(独り言), 60代(5歳未満孫娘)
	→	1	60代(5歳未満孫娘)	
何かに気づく	ある物事に気づく	↓	3	30代(独り言), 40代(独り言), 50代(独り言)
		↑	3	40代(独り言), 50代(独り言), 60代(独り言)5回
		devoiced	1	70代(独り言)
	自身の失敗に気づく	↓	3	60代2名(独り言), 70代(独り言)
	→	2	40代(独り言), 70代(独り言)	
相手の発言・行為に喜ぶ		noise	1	50代(50代友人女)
		↓	1	50代(80代母)
		↑↓	1	40代(ペット)
あいづちをうつ		↓	4	20代(50代上司男), 40代(40代友人女), 50代(50代友人男), 60代(50代妹)
		devoiced	1	30代(10代息子)
相手の意識を向ける	相手に声をかける	devoiced	2	20代(ペット), 60代(5歳未満孫娘)2回
		↑	1	40代(ペット)
		↓	1	60代(5歳未満孫娘)3回
	相手の注意を引く	↑↓	4	40代(40代友人女), 50代2名(40代と50代同僚女2回, 40代友人女), 60代(5歳未満孫娘)
		↓	2	30代(20代職場の後輩女), 40代(40代友人女)2回
		↑	2	40代2名(40代友人女, 10代息子)

表3のように、『CEJC』において女性は、「何かに驚く」「何かに気づく」「相手の発言・行為に喜ぶ」「あいづちをうつ」「相手の意識を向ける」時に「あら」と発している。「何かに驚く」「何かに気づく」「相手の発言・行為に喜ぶ」のように、ある物事によって「あら」という発話が引き起こされる場合と、「あいづちをうつ」「相手の意識を向ける」のように、話し手が意識的に「あら」という語を使用する場合がある。また、「あら」が誰との会話で用いられているのかについて見ると、「何かに驚く」「相手の発言・行為に喜ぶ」「あいづちをうつ」「相手の意識を向ける」時の「あら」は、主に家族や友人といった親しい人との会話の中で見られる。それに対して、「何かに気づく」時に発せられる「あら」はすべて独り言で用いられている。

20代から60代という幅広い年代に最も多く使われているのは、「何かに驚く」際の「あら」である。「何かに驚く」は「相手の発言に驚く」と「ある物事を見て驚く」に下位分類することができる。浅田(2017)は、下降型の「あら」は主に中年以上の女性が用いて「問題に気づき驚く声」を表すと述べていた。『CEJC』では、「相手の発言に驚く」時には下降型が最も多く使われているが、「ある物事を見て驚く」場合には下降型は使われていない。

二番目に多く使われているのは「何かに気づく」と「相手の意識を向ける」である。「何かに気づく」は、「ある物事に

気づく」と「自身の失敗に気づく」に下位分類することができる。「何かに気づく」際には下降型が最も多く使われている。一方の「相手の意識を向ける」は、「相手に声をかける」と「相手の注意を引く」に下位分類することができる。「相手の注意を引く」際に上昇下降型が多く用いられているのが特徴である。

続いて、男性の場合を見る。表4は男性が「あら」を誰に対して、どのような機能で用いているのか、またその際、どのような音調が使われているかをまとめたものである。

表4 男性の「あら」の使用

「あら」の機能		音調	人数	使用者の年代 (会話の相手)
何かに驚く	相手の発言に驚く	↓	3	20代2名 (50代母, 20代後輩男2回, 50代男性教員), 50代 (20代娘) 2回
		↑	2	20代2名 (50代母, 20代後輩男)
		↑↓	1	20代 (20代後輩男2回, 50代教員男, 20代友人男)
	ある物事を見て驚く	↑	1	20代 (独り言)
何かに気づく	ある物事に気づく	↓	1	30代 (5歳未満の娘)
		devoiced	1	70代 (独り言)
	自身の失敗に気づく	↑	1	50代 (独り事)
		→	1	80代 (独り言)
あいづちをうつ		↓	1	20代 (20代後輩) 8回

表4のように、男性は、「何かに驚く」「何かに気づく」「あいづちをうつ」際に「あら」と発している。男性が「あら」を誰との会話でどのように用いているのかについて見ると、女性と同様、主に家族や親しい人との会話で、「何かに驚く」「あいづちをうつ」時に用いている。また、「何かに気づく」時も1例を除き、独り言で用いている。しかし、女性が用いていた「相手の発言・行為に喜ぶ」「相手の意識を向ける」という機能は男性では見られなかった。最もよく使われているのは女性と同様、「何かに驚く」時であり、その中でも「相手の発言に驚く」時に多く用いられている。音調は下降型が多いが、その他の型も見られた。

6. まとめ

本研究は、『CEJC』をもとに、感動詞「あら」が実際の会話で用いられる際の音調の型の分類と、「あら」の機能と音調との関連性について分析を行った。その結果、音調に関しては、先行研究で指摘されていた下降型、上昇型、平坦型に加えて、上昇下降型、無声化や「きしみ声」化による不明型という5つの型に分類が可能であることがわかった。また、『CEJC』で用いられている「あら」の機能には、「何かに驚く」「何かに気づく」「相手の発言・行為に喜ぶ」「あいづちをうつ」「相手の意識を向ける」という5つがあることがわかった。女性が使用している「あら」はそれら5つに分類できるが、男性が使用している「あら」はその中の「何かに驚く」「何かに気づく」「あいづちをうつ」という3つのみであった。男女ともに最も多く使われているのは「何かに驚く」時の「あら」であり、その中でも下降型の音調の「相手の発言に驚く」時の「あら」が多く使われていることがわかった。

今後は、今回考察の対象としなかった「あらー」「あらま」などについても調査および分析を行い、「あら」との共通点、相違点についても明らかにしたいと考えている。

参考文献

浅田秀子 (2017). 現代感動詞用法事典 東京堂出版

小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・白田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉 (2019). 『日本語日常会話コーパス』モニター公開版の設計と特徴 言語処理学会第25回年次大会発表論文集, 367-370.

郡史郎 (2018). 感動詞の高さの動きから見る日本語の会話表現のイントネーションの特徴 大阪大学言語文化学, 27, 69-81.

田窪行則・金水敏 (1997). 応答詞・感動詞の談話的機能 音声文法研究会 (編) 文法と音声 くろしお出版 pp. 257-279.